

## 第 22 回 手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）

### 「聞取り通訳試験」問題

#### 第 1 問「仕事の中で」

私は今、介護のケアマネジャーをしています。この仕事は、要介護者や要支援者、また、そのご家族などにお会いして状況や要望を聞き、相談に乗りながら「ケアプラン」という介護サービスの計画を作成することです。

決して楽な仕事ではなく、毎日しんどい思いをしています。明るく生きているお年寄りに出会って、元気をもらうことがあります。

佐々木さんもその一人です。74 歳になる彼は、3 年前に脳梗塞を患い、右手に麻痺が少し残っていて、お箸を使つての食事や字を書くことは難しく、思うようにならないこともしばしばです。

佐々木さんは、自分の右手とお箸をテープで固定してみたり、文字を左手で書いてみたり、いろいろチャレンジしています。

「俺はいつも前向きでいたいんだよ。」と笑顔で話す佐々木さんは、根気よく努力し、一つひとつの困難をクリアして、はつらつとお元気でいらっしゃいます。そんな佐々木さんを見ると、この仕事への励みを感じます。

#### 第 2 問「私の友人」

友人の話である。子供たちも成人したからと、彼は会社を突然辞めた。調理師学校に通ったあと、数年前に長野県伊那市の里山でペンションの経営を始めた。

彼がそんな決心をしたのは、登山家の野口健氏が富士山の清掃活動をしていることを知ったからだった。野口氏が活動を始めた 11 年前は 100 人ほどの参加者だったのが、昨年は 6,800 人にもなったという。

野口氏は、この活動のほかにも、登山のときにガイドやポーターをしてくれるシェルパのための基金を作り、シェルパが遭難した際の補償やその遺児の教育にあてている。

友人は、自分より若い野口氏が登山を通して環境問題から人権問題まで考え、実践していることに感動し、自分も自然の中で緑を守り育てながら暮らしたいと考えた、と言うのだ。

彼は料理の腕もなかなかのものであるが、宿泊客を里山に案内して、自然と結びついた生活の尊さを伝えようとするなど精力的に活動している。

## 第22回 手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験） 「読取り通訳試験」問題（要約文）

### 第1問「ろう協会長の福祉課長への要望」（要約文）

課長さんはデフリンピックを知っていらっしゃいますか。パラリンピックとは別のものです。ろう者のオリンピックとされています。

パラリンピックより古い歴史があり、最初の大会は1924年にパリで開催されています。ついこの間の台北デフリンピックには選手と役員を合わせて245名の選手団が行って、陸上、卓球、バレーボール、水泳、柔道、空手、テニス、ボウリングで、金5銀6銅9の合計20個のメダルを獲得しています。

しかし、デフリンピックの知名度はまだ低いのです。平成18年に内閣府が調査した結果では、国民の94.1%が「パラリンピックを知っている」と答えたそうですが、「デフリンピックを知っている」と答えたのは、わずか、2.8%だったそうです。

それで、デフリンピックのことをもっと多くの市民に知ってもらうために、市の広報紙で紹介していただきたいのです。課長さん、ご検討をお願いします。

### 第2問「落語に学ぶ」（要約文）

先日、私は、手話のわかる聞こえる友人と一緒に公民館のワークショップに参加しました。講師は、プロの落語家で、内容は、言葉やしぐさでお客さんを物語に引き込んでいく落語のテクニックについてでした。

例えば、体の向きと視線を左右に振り分けて、二人の会話を再現する技術があります。

「ああ、100円ある？」

「100円なら、貸してあげましょう。」

「ありがとうございます。100円もらって貯金が一億円になりましたあ。」

こんなちょっとした話でも落語の演者はお客さんを盛り上げることができるのです。落語の基本はしぐさです。蕎麦そばをすするしぐさでは、扇子はしを箸に見立てて、同時に、手の形でどんぶりの大きさを表現し、蕎麦の熱さは、フーフーと息を吹きかけるしぐさで表します。このようにひとつひとつのしぐさを丁寧に頭の中で考えて表現すると、お客さんに伝わるそうです。

私は地域で手話講座の講師を担当していますが、受講者たちは日本語につられての表現しかできません。ろう者の使う手話表現をどのように指導すればよいのか、行き詰まっていたところでした。

恥ずかしがらないで、大きな身振りで表現することが重要だとワークショップで知ったので、それを自分なりに咀嚼そしゃくして、手話講座で指導していこうと思いました。